

学

園

長

だ

よ

り

第45回

花言葉

愛知淑徳学園・学園長

小林素文

今から50年前、愛知淑徳大学が創立さ

れた2年目に、1年生と2年生だけで第1回大学祭を「淑大祭」と名付け開催しました。「何かやりたい」との1年生の声に押され2年生もまとまり、9月に実行委員会が発足。わずか3か月の準備期間で立派に大学祭を成功させたのです。

その熱い思いは受け継がれ「第3回淑大祭」の実行委員長は次のように回想しています（「愛知淑徳大学の15年」より）。

全員一致団結してやり遂げました。当時友人から「1年間で3日間のために過」す学祭委員」と笑われたものでした。それだけに、学祭のフィナーレ、当時はやったサザンの「勝手にシンドバッド」に踊りまくり、涙ながらの胸上げ、万歳三唱したことは、今でもはつきり覚えています。

*

「淑大祭」は「宿題」を連想するからと、第6回の学祭委員が「淑楓祭」と改称し、

今日に至っています。

当時、「星が丘キャンパス」は「桜が丘キャンパス」と呼称していたほど桜が美しいキャンパスで、愛知淑徳短期大学が「淑短祭」を行っていました。一方、大学がある「長久手キャンパス」は里山の中にボツンとあるキャンパスで、秋の彩りが美しく「淑楓祭」はびつたりの名称でした。

それから44年経ち、本年度の「淑楓祭」のテーマは「楓」。「楓」の花言葉が「美しい変化」「大切な思い出」だからとのこと。第50回という節目にふさわしいテーマを選んだ学祭委員たちの感性は素晴らしい。

*

奥山に紅葉踏み分け鳴く鹿の
声きくときぞ秋はかなしき

彩り豊かでどこか侘しい秋の風情は古くからの日本の原風景。百人一首にあるこの歌に「美しい変化」「大切な思い出」を感じ入ります。

「楓」の花言葉には他にも「調和」「遠慮」

があります。

秋の夕日に照る山紅葉
濃いも薄いも数ある中に
松をいろどる楓や蔦は

山のふもとの裾模様

いろとりどりの落葉樹に常緑樹も調和し溶け込んでいる里の秋を詠った唱歌「紅葉（もみじ）」は心の琴線に響いてきます。

花楓盛りのときを慎ましく（是永素江）
楓の葉があざやかに色づくのとは対照的に、楓の花はひっそりと遠慮がちなのがいいですね。

*

短歌、唱歌、俳句に詠われる楓が秋を彩っていた大学周辺は開発が進み、里山の風情はなくなりました。キャンパス内も学部増に伴い、校舎を建て増す過程で大木はお祓いをして伐採し、少なくなった空きスペースには桜やハナミズキなどの低木が植樹されました。

淑楓祭が終わったあと、校内に大木と



右の楓の落葉



クラブ室の裏の楓の木

なる楓はないかと散策したところ、ありました。クラブ室が立ち並ぶ裏手に大きな楓の木がありました。
並ぶ木の中一本の紅葉かな（有村きみ子）